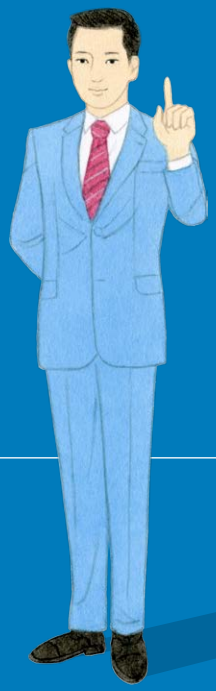
健康オフィス神戸

知っておこう！

すこやかオフィスのつくりかた

〈処方せん編〉



健康オフィス神戸

私たちは、ワーク・ライフ・バランスの推進を目的として、働く場であるオフィスに対してその環境の面からアプローチする「健康オフィス神戸」をスタートしました。

“健康”と“オフィス”一見すると全く関係のないような2つのキーワードですが、ワーク・ライフ・バランスというフィルターを通すことで、「生産性向上」や「業務の効率化」など、“働き方改革”につながるヒントが見えてきます。

長時間労働の是正等だけではなく、企業としての「生産性」や「効率化」に対しても貢献できるオフィス改革の手引きとして、『知っておこう!すこやかオフィスのつくりかた〈処方せん編〉』を作成しました。ぜひ、手にとって貴事業所におけるオフィス改革の参考にご活用ください。

INDEX

オフィスの
“すこやか度”を上げる
8つの処方せん　3

理想のオフィス
について考える
ワークショップのすすめ　5

いち早く環境改善を実現したオフィス改革事例集

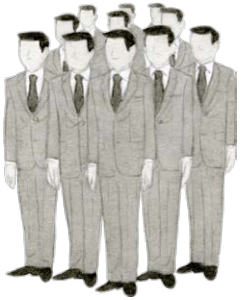
CASE 01　株式会社神戸マツダ　9
CASE 02　中日輪船商事株式会社　11
CASE 03　株式会社神戸デジタル･ラボ　12
CASE 04　コクヨマーケティング株式会社 神戸支店　13
CASE 05　メック株式会社　14
CASE 06　株式会社ダイセル　イノベーション･パーク[iCube]　15
CASE 07　ヤマト インターナショナル株式会社　17
CASE 08　株式会社フジクラ　19
CASE 09　株式会社リンクアンドモチベーショングループ本社　21

協力企業（敬称略、五十音順）
株式会社イトーキ／イナバインターナショナル株式会社／株式会社内田洋行／株式会社オカムラ／株式会社カラーズ・ワーク・エンバイロメント／
コクヨマーケティング株式会社／一級建築士事務所シンクスタジオ／株式会社スウィング

オフィスの“すこやか度”を上げる 8つの処方せん

元気がない、変化もない。やる気が続かず疲れやすい…。
そんな不健康なお悩みを、オフィス空間から改善！
みんながいきいき働ける環境づくりに向けた、8つのポイントをお教えしましょう。

［オフィス空間に「うちの会社らしい」と感じるデザイン要素が見当たらない。］



仕事場に愛着や誇りをもつために…

1 他社とは違う“らしさ”のあるオフィス空間へ。

どんな企業にも、独自の文化やビジョンがあるはずです。それを表現した「他社とは違う何か」が感じられるオフィス空間は、働く人の帰属意識やチームの連帯感を育みます。コーポレートカラーを基調としたり、オリジナルの家具を取り入れるなど、“わが社らしさ”のある空間づくりが大切です。

［目につく場所にグリーン（観葉植物など）がない。］

［社員の椅子は長いこと座っているとツライ時がある。］

［紙の書類が多く探す手間や収納スペースに困っている。］

ストレスや身体への負担を減らすために…

2 観葉植物などのグリーンを置いて癒しをプラス。

植物の緑が目の疲労やストレスを軽減することは知られていますが、植物には空気をキレイにする効果や、室内の温度と湿度を適度に保つ効果もあります。さらに、植物が目に入れば緊張が和らぎ、作業効率が高まるとも言われています。植物の緑があるかないかで、働きやすさに大きな差がつきます。

3 椅子の座り心地にこだわれば疲れ知らず。

背もたれや座面の形状、素材に配慮された、正しい姿勢で座れる椅子にこだわりましょう。体圧が適正に分散され、背骨が自然なS字形状に近づく椅子なら上半身に負担がかかりません。一人ひとり体格は違うので、微調整できる機能も重要です。また、肘掛けも肩への負担軽減や体圧分散に効果的です。

作業効率や生産性を上げるために…

4 ペーパーレス化で面倒も面積もグングッと減量。

検索や決裁に時間がかかり、保管の場所も取る「紙」の文書は、できるだけ減らすことを考えましょう。必要な情報だけスキャンをして、データベース化を進めるなどしてアクティブな書類だけ残すようにします。オフィス空間が見違えるほどスッキリし、業務もスリム化されること請け合いです。

社内で仕事をする時は
自分の席でやる。

会議はだいたい決まった机や
椅子の配置で行う。

作業や会議は
普通、座ってやるものだと思う。

他のチームや他部署の人と雑談したり
一緒に何かに取り組む機会が少ない。

5 固定席ではなく場を選んで働けば“脳率”アップ。

仕事の内容や目的に合わせ、主体的に働く場を選択できるようにすれば、モチベーションや創造性、作業効率などが高まります。自分の席を決めず、空いている席を自由に選ぶフリーアドレスの採用はもちろん、一人で集中できる場や、リラックスして思考できるソファを設けることなどが有効です。

6 元気のない会議もカタチを変えれば活気づく。

会議で大切なのは、活発な議論が起こること。元気がないと感じたら、いつもの形式を捨ててみてはどうでしょう。自分たちでテーブルや椅子の配置を変えたほうが、発言数や発言時間が多くなることがわかっています。テーブルをなくし、椅子だけで車座になる、そんなスタイルも大いにありえます。

7 時には立ち姿勢でいきいき作業、サクッと会議。

デスクに座りっぱなしで作業していると、身体に負担がかかり、気分的にも煮詰まってきます。立って作業できるスペースをつくれば効率が上がり、会議もスピードアップ。椅子がいらないので、より大人数で会議ができる利点もあり、全員で書類をのぞき込みながら比較検討する場合などにも便利です。

コミュニケーション&
イノベーションを興すために…

8 新しい出会いとアイデアを生む共有・共創スペースを。

多くの人が滞在する空間では自然に会話が生まれ、そこからアイデアも生まれます。コーヒーメーカーを置くなど、“40秒”とどまる仕掛けをつくることがポイント。また、多目的な共創スペースを設け、そこでイベントなどを開けば、他部門や他社の人との出会いがイノベーションのきっかけに！

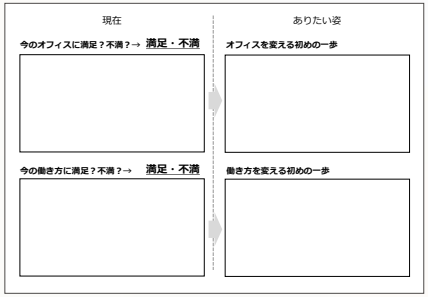
理想のオフィスについて考えてみよう！

オフィスの環境改善に向け、具体的に動き出してみませんか？その手段のひとつがワークショップを開くこと。社内で開催してもよし、異業種のメンバーが集まってもよし…。現状を見つめ直すことから始め、具体的な行動指針まで導き出すことができます。

WORK 1

現状のオフィス空間と働き方を見つめ直す

オフィスの＜現状＞について記入するワークシートを一人ひとりに用意。まず各自で「今のオフィス空間」に満足か不満かを考え、その理由を箇条書きで具体的にしていきます。同様に、制度などを含めた「今の働き方」についても考えます。



WORK 2

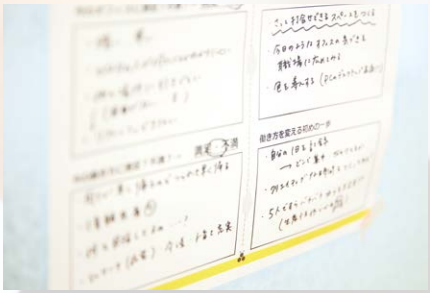
「あったらいいな」のヒントを集める

オフィス内にどんな場所が欲しいか、事例集などを見てヒントを集めます。他社を見学させてもらってもいいかも。その内容をもとに、自分の考えた＜お気に入りスポット＞について絵や写真で表現し、説明を加えます。ここで中間発表を行い、賛同できる他の人の案に投票するなどしても盛り上がります。

WORK 3

オフィスと自分自身の「ありたい姿」を発表

これまでのワークを振り返って、今後の＜ありたい姿＞と、そのために自分は何から取り組んでいくかを考えます。最後に、その内容を各自プレゼンテーションし、みんなの前で宣言。違う会社のメンバーが集まっている場合は、それぞれに成果を持ち帰り、自社にオフィス空間改善の考え方を広めます。



ワークショップ実践例

未来のオフィスと「はたらく」を考えるワークショップ

神戸市内の別々の企業で働く若手7名が、株式会社オカムラの共創空間“bee”に集合。働き方改革についての座学や、同社の次世代型オフィスの見学も挟みながら、楽しんでワークショップに取り組みました。

オフィスを見学

社員の方に案内していただきながらオフィスを見て回り、働きやすさへの工夫について説明を聞きました。ステージのように一段上がった多目的スペース、上下昇降デスクなど、数々の仕掛けに全員が興味津々！

お気に入りスポットは？

見学で発見したお気に入りスポットをヒントに、自分のオフィスに欲しい場所を考え、自分なりにネーミングにも工夫。「どんな仕事に向いた場所か？」「働き方がどう変わるか？」などの説明を加えました。

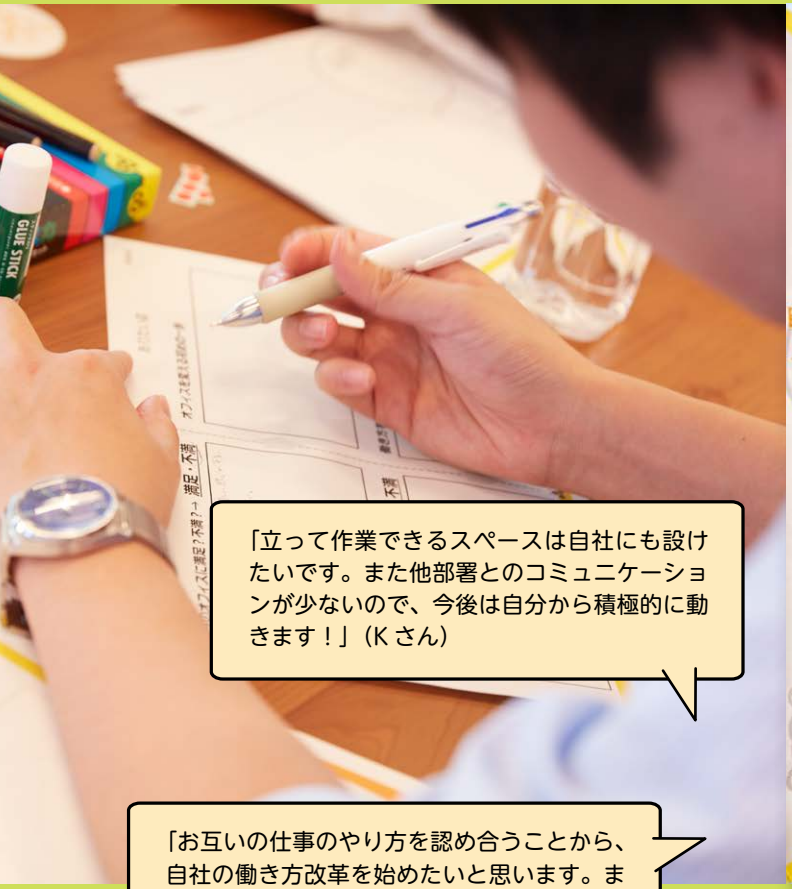
プレゼンテーション！

「オフィスを変える初めの一歩」では、立って作業できるスペースづくりや、感性を刺激する色の導入。「働き方を変える初めの一歩」では、自分の1日を記録してみる、互いの仕事スタイルを認め合うといった発表がありました。

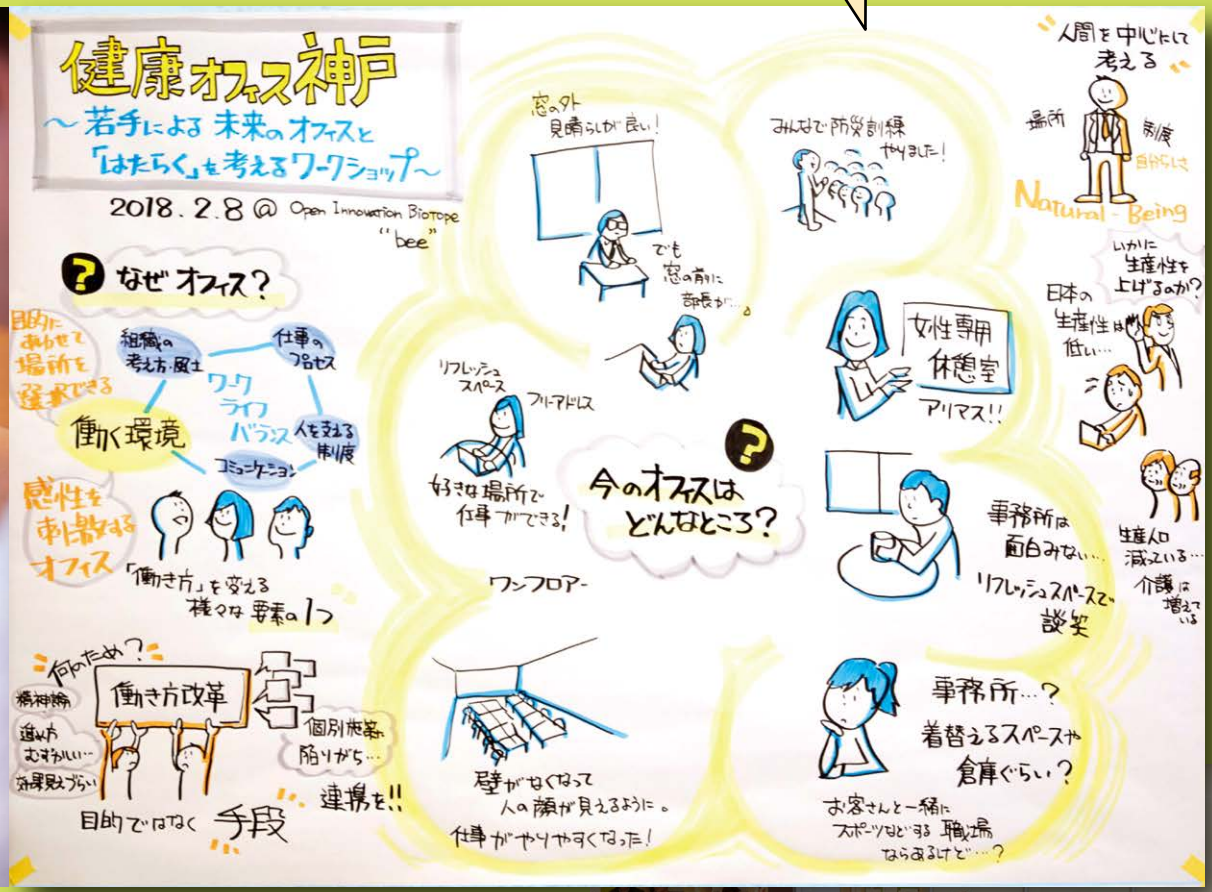
ワークショップを通じて私たちが感じたこと、気づいたこと。

先進的なオフィスを見学し、業種の違う他の参加者の意見も聞くことで、多くの気づきやヒントを得られたワークショップ。そのプロセスは「グラフィックレコード」という手法でビジュアルとして記録しました。

「建物は変えにくくても、オフィス家具を変えたり、交流スペースをつくることならできそうです。環境をつくって終わりではなく、根付かせないといけませんね」（N さん）



「立って作業できるスペースは自社にも設けたいです。また他部署とのコミュニケーションが少ないので、今後は自分から積極的に動きます！」（K さん）



「お互いの仕事のやり方を認め合うことから、自社の働き方改革を始めたいと思います。また、オフィスが明るくなる色もぜひ取り入れたいです」（S さん）

「先進的なオフィスの見学はワクワクする刺激がありました。自社でも立ち姿勢での会議を始めていますが、さらに本格化して習慣づけたいと感じました」（N さん）

「自社は旧態依然としたオフィス。何かを変えようとすると否定的な意見が出てくるものですが、話し合いを重ねてみんなに快適な環境を実現したいです」（Y さん）

「リフレッシュできるスペースをつくり、働く場を選べるようにしたい。まずは自分の1日の行動や仕事のやり方を見直し、自分から声を上げていきます」（Tさん）

「気軽にコミュニケーションできるスペースを見学することで、学生の頃は雑談から生まれるアイデアって確かにあったなと。その面白さを思い出しました」（S さん）

グラフィックレコーダー：松井　大氏

たくさんの気づきがありました！

参加企業（敬称略、五十音順）　株式会社アシックス　川崎重工業株式会社　株式会社神戸デジタル・ラボ　神鋼不動産株式会社　株式会社ドクターミール　三ツ星ベルト株式会社

オフィスの中央を貫く「ヒストリーロード」、その両側に配した「スタジアム」がオフィス空間の2大ポイント。

CASE 01

株式会社神戸マツダ

ブランドを随所に表現し、誇りを持って笑顔で働ける場へ。

神戸マツダは2011年の創業70周年を機に、経営のあり方や働き方を抜本的に見直す「創新9ヶ年計画」を策定。オフィスリニューアルはその一環として、ワークスペースとワークスタイルの変革をめざして行われました。それまでは本社機能が2階と5階に分かれ、コミュニケーションが取りづらく、空間の統一感やセキュリティ面でも課題があったといいます。「スマイルファクトリー」と名付けられた新オフィスでは、本社機能を3階に集約。随所に「マツダブランド」「神戸マツダらしさ」を表現するとともに、社員同士のコミュニケーションの活性化を図るスペースも設けました。

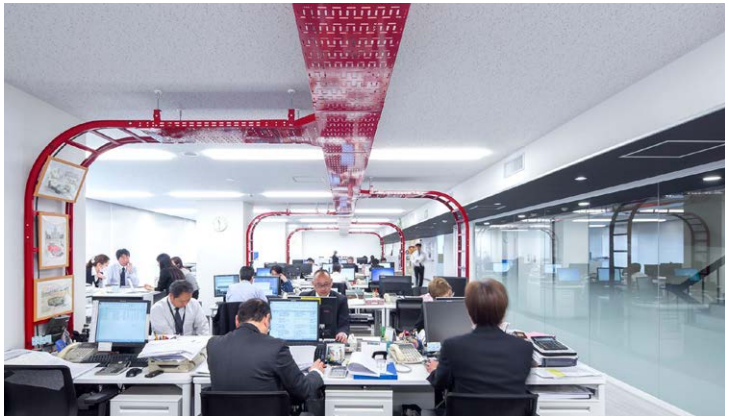
ショールームも、最新のマツダ車を体感できるスペースとしてシックな装いに一新。ブランドロゴが大きく掲げられた受付は、本社に来られるすべてのお客様に応対する会社全体の"顔"の役割を果たします。

よりカジュアルに集える、木を採用したスタジアム。ヒストリーロードを通る人が、飛び入りでコミュニケーションもしやすいオープンなしつらえです。

デスクを自由にレイアウトでき、スクリーン機能も備えたスタジアム。部門を越えた白熱のコミュニケーションスペースです。

コミュニケーションを生む「ヒストリーロード」と「スタジアム」

ワンフロアとなったオフィスの中央を貫く動線は「ヒストリーロード」。77年の歴史を常に身近に感じながら、一方で過去にとらわれないクリエイティブな取り組みを目指します。オフィス中央には、ヒストリーロードとクロスする形で「スタジアム」と呼ばれるスペースも設置。ベンチソファでくつろぎながら話し合えるスペースと、デスクで会議やセミナーなどが行えるスペースに分かれており、多目的に活用できます。



ケーブルラックは、マツダ独自の「ソウルレッド」に近い色で塗装。曲線が空間の雰囲気をやわらげ、社員同士の有機的なつながりをもイメージさせます。

フロアは黒を基調としながらも、ガラス張りの採用などで明るいオフィスを実現。

愛社精神と新しい発想を自然に育むワークスペース

ワークスペースで目を引く赤のケーブルラックは、機能性を発揮するとともに工場の雰囲気を演出。デスクと引き出しは分離型で、よりクリエイティブに働くための配置換えにも柔軟に対応できます。また、随所にミーティングスペースが設けられており、マツダらしさを物語る変形テーブルが採用されています。クリエイティブな発想を刺激するオフィス環境を整え、同社では次の80周年に向けてさらなる成長をめざしています。

作業台や打ち合わせを想定したテーブルは、仕事が効率的になり、短時間のコミュニケーションの場としても重宝。

ミーティングスペースのテーブルは、同社のロータリーエンジンをイメージした形。

機密性の高い打ち合わせに最適な、高めの壁で囲ったソファスペース。

CASE 02

中日輪船商事株式会社

透明性の高いパーティションを取り入れ、明るさを保った執務スペース。新社屋の完成から一定の時を経た今も、お客様から「いつも綺麗なオフィスですね」と評価されているのだとか。

管理部のデスクは、コンセントレーションとコミュニケーションの両立が図れる120°のデスクを採用。営業部では、フレキシブルなフリーアドレスを導入しています。

白を基調とした明るいエントランス。執務スペースへはセキュリティカードがないと入れないようにし、旧社屋での不安も解消されました。

南極横断の旅に出て漂流するも、団結力と不撓不屈の精神で全員が生還した「エンデュアランス号」の物語を大切にしている同社。会議室を「endurance1914（エンデュアランス 1914）」と名付けました。また、応接室にはエンデュアランス号の模型が飾られています。

「人が全て」の理念のもと、各々の働きやすさを追求。

主に船舶用の機器や塗料を扱う商社として、長年の歴史を誇る中日輪船商事株式会社。もともと「商社にとって人が全てである」という企業理念のもと、働き方改革を導入するべく、社内制度や育成環境の整備を進めているところでした。旧社屋の老朽化やセキュリティ面への不安から2010年に完成させた新社屋では、よりいっそうの働きやすさを追求。実質的な執務スペースをワンフロアに集約し、部署によって異なる働き方に配慮したデスクを導入しました。また、コミュニケーションを活性化するラウンジやライブラリーコーナーも設置。2015年には新社屋で創業100周年を迎え、次の100年へと新たなスタートを切ることができました。

南面に位置するラウンジは、気軽な情報交換の場。神戸港を一望する絶景も自慢で、陸舶用機器を扱う同社にぴったりのロケーションです。

エントランスと連動させ、白を基調とした廊下周り。会議室などが並び、ガラス張りと大きな窓によって明るく演出されています。

フロアの中央に設けられたライブラリーコーナー。誰もが立ち寄ることができ、ちょっとした打ち合わせもここで行えます。

CASE 03

株式会社
神戸デジタル・ラボ

5階ワークスペースの中心に存在する、オフィスデザインの象徴的な空間。天井のパーゴラがリゾート感を醸し出し、ランチタイムや休憩、気軽な打ち合わせなどに使われています。

開放的でエネルギッシュな企業文化を表現。

1995年、阪神・淡路大震災の年に創業し、IT企業として成長を続ける株式会社神戸デジタル・ラボ。以前のオフィスはワンフロアだったものの、誰もが固定席でパソコンに向かっていて話しづらいという、現代の働く場にありがちな雰囲気だったそうです。新オフィスは「港町・神戸の企業としてのアイデンティティ」をコンセプトに、4階がエントランスおよび外部との会議室、5階がメインのワークスペース、10階が社内での打ち合わせフロアという構成。部門ごとに出し合った合計100以上もの要望もクリアしつつ、開放的でエネルギッシュな企業文化を内包するオフィス空間ができあがりました。

パーゴラのある空間の正面に見える、水色の壁裏がこのスペース。少人数でのブレーンストーミングに最適で、ホワイトボードに自由にアイデアを描きながら話し合えます。

ワークスペースには、フレキシブルに使える細長い大テーブルを配置。プロジェクトごとにメンバーが集まって仕事でき、プロジェクトが終われば配置替えも簡単です。さらに周囲にも、窓際などを活かして多様な作業スペースが用意されています。

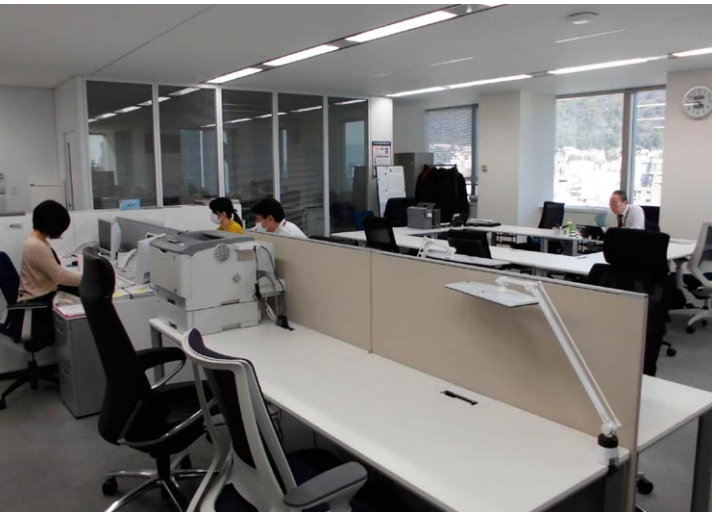
リフレッシュしたり、集中して作業ができるスペースがほしいという要望から生まれたエリア。一人掛けソファ、通称「ほっとシート」ではちょっとした休憩も取れます。

ワークスペースの一角に設けられたカウンターは、曲線になっていることがポイント。チェアに座れば“さりげない対面式”となり、パソコンに向かう時間を離れて自然に人とコミュニケーションできます。

10階には、社内でのクローズドな会議やセミナーなどを行う部屋がいくつも配置されています。ホールの一角には、木造船の古材を思わせる壁が印象的な待合スペースも。

CASE 04

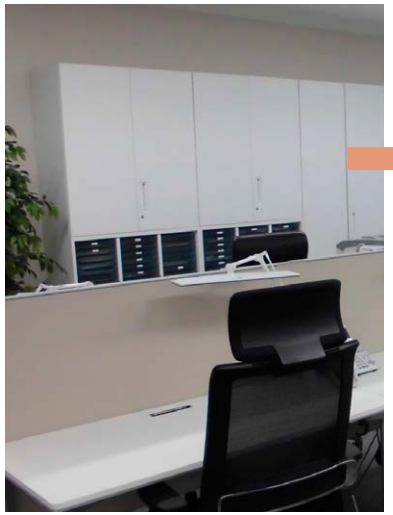
コクヨマーケティング株式会社



各拠点を結ぶサテライトオフィスとして機能している神戸支店。レイアウト変更にあたっては、スタッフで分科会をつくって話し合いを重ねました。

どんな企業にも参考になる「書類棚の整理」を実践。

文房具やオフィス家具とともに、働く場のあり方まで提案しているコクヨマーケティング株式会社。2013年に神戸支店を駅近のオフィスに移転した後も、さらに検討を重ね、2017年に再びレイアウトを変更しました。スタッフ同士がより情報を共有しやすいよう、またワークショップなども行えるようにデスクの配置を変えたほか、特に力を入れたのが「書類棚の整理」。自社のファイルボックスも駆使してつくり上げた出し入れしやすい収納は、「大々的なリニューアルはできないけれど…」という企業にも大いに参考になります。あなたのオフィスも、こんなスモールチャレンジから「働き方改革」しませんか？



整理前

限られたスペースでも、探しやすくスッキリ見える収納へ

オフィス空間の提案をするなら、まずは自社から！と一念発起して着手した書類棚。以前はどんなオフィスにもよくある、系統立てて整理されていない状態でした。不要な書類は処分して全体のボリュームを減らしつつ、必要なものはファイルボックスを使って保管・管理。ファイリングを全員で楽しみながら運用するための仕掛けにもご注目ください。

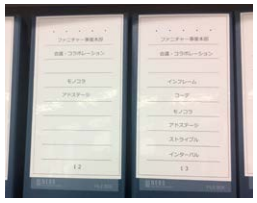
ファイルボックスの色を利用して、神戸の夜景を表現。紺は夜空、赤はポートタワー、深緑は六甲山、黒は夜の神戸港を表しています。これによって全員が景観を乱さないように意識し、常に整頓して運用できるようになりました。

3列は書類スペース、2列は文房具の集中管理スペース。文房具は16品目に分け、それぞれ中身がわかりやすいピクトサインや補充カードを付けています。ファイルボックスを使えばスペースを無駄なく使えるので、防災備蓄用品を収納できるスペースも生まれました。

共用書類

社内文具

防災備蓄



書類は、ファイルボックスを使って立てて収納することで棚のスペースを有効活用できます。ファイルボックスにタイトルを付けることで検索性もアップします。

よく使う共用の文房具は必要分だけ外に出し、透明ケースで管理。ここでも品目ごとに分け、ひと目で中身がわかるピクトサインを付けています。

CASE 05

メック株式会社

3階の階段横に設けられたコミュニケーションスペース。テーブルやソファが置かれ、カジュアルな雰囲気で交流できます。

3階の執務エリアでは、移転前に実施したアンケートの結果から、異なる3種類のチェアを採用しているのがユニーク。研究部門のフリーアドレス席はデスクの天板を木目調とし、固定席と区別しています。

オープンなファミレスタイプの席も設けられ、気軽な打ち合わせの場として活用されています。

上下左右に移動しながら部門を超えて会話するオフィス。

メック株式会社は工業用の化学薬品メーカー。以前は研究所と工場が別々の場所にありましたが、スペース不足や老朽化を解決するべく集約を図りました。新オフィス3階の執務エリアには、本社・営業、研究、生産の部門が同居。研究部門のメンバーは実験室への移動や出張が多いため、約3分の2をフリーアドレスに。結果、コミュニケーションの頻度が高まり、業務が効率化したほか、人数の増加にも対応できるようになったとか。また、3階の階段の吹き抜け周りに「コミュニケーションスペース」、2階の同じ位置に「ライブラリーコーナー」を設けるなど、部門間の交流を促す工夫も盛り込まれています。

2階のライブラリースペース。さまざまなシーンで活用できる変形テーブルが置かれ、右側には生産を担う工場が見えます。

作業台や立ち会議の場など、多目的に使える上下昇降テーブルを採用。テーブルの下には共用の備品などが集約されています。

3階に設けられた多目的室には多彩な席を用意。ランチタイムはもちろん、レイアウトを変えて打ち合わせなどにも利用されています。

4階の執務エリア。円形のブースでは、モニターを見ながら気軽に打ち合わせができます。

CASE 06

株式会社ダイセル
イノベーションパーク
[iCube]

自由なワークスタイルと出会いから“新しいコト”が生まれる。

セルロイド製造に始まり、現在は化学工業の枠を超えて事業領域を拡大しているダイセル。さらなる新事業の創出をめざし、姫路市にあった「総合研究所」と「姫路技術本社」を、新たに「イノベーション・パーク」として集約しました。その中核となるのが、執務棟の役割を担う「iCube（アイキューブ）」。研究者のコミュニケーションを誘発する「新たな融合を生む場」、研究者がひらめきのヒントに出会える「感性を刺激する多様な場」、研究者のパフォーマンス・帰属意識を高める「ワクワクをもたらす場」という３つの要素を求めて誕生しました。

社外とも積極的に協業する同社。エントランスホールには企業ロゴを大きく掲げ、サイネージで同社の歴史や事業を紹介しています。

3階の接続廊下に設けられたS字型のソファ。

窓際に設けられた、アイデアを喚起するためのソファ。ひらめいたら即、パソコンに入力も可能。

上下昇降デスクにより、立ち姿勢で仕事が可能。ふと横を見ると、豊かな緑が目に入ります。

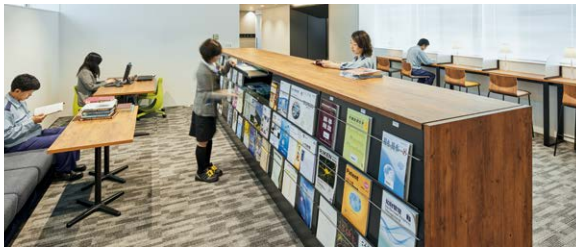
高めの壁に囲われた独立感のあるブースは、一人で集中して作業できます。

その日の仕事内容に合わせて、“場”や“スタイル”を自由に選択

フリーアドレスを導入した広大な執務エリアは、コーポレートカラーであるブルーを基調とした空間。ところどころに配された暖色や明るい木目が、ブルーを引き立てながら空間のアクセントとなっています。このクリエイティビティをかき立てる空間に、大テーブルをはじめ、立って仕事ができるデスク、一人で集中できるブースなどの多様なスペースを用意。仕事内容や状況によって選択できるため、モチベーションも効率も上がります。

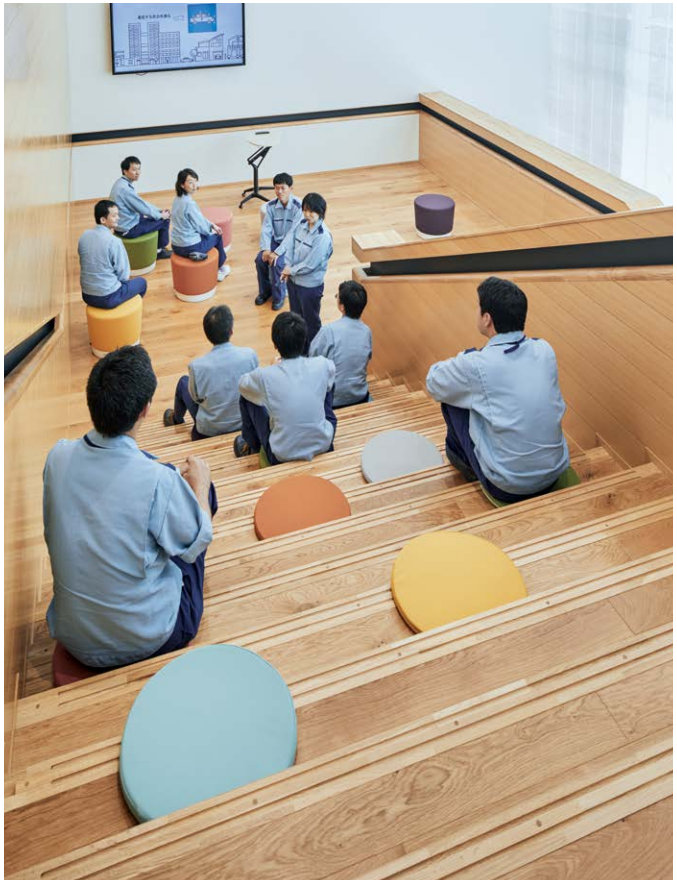
若手の意見も取り入れて、随所に語らいの場を実現

部門を越えた交流を育む、共有・共創スペースが多いことも同社の特長。執務エリアと実験エリアをつなぐ廊下さえも、エリアを行き来する研究者たちの偶発的な交流を促す場となっています。計画するにあたっては、若手の意見も積極的に取り入れ、研究者みんなで検討したのだとか。多様な空間を動き回ることで出会いが生まれ、気軽な会話から新しいアイデアが生まれ、さらにはイノベーションが起こる　同社の基本理念「The Best Solution for You」を追求する姿勢が、オリジナリティ豊かな働く場の創出につながりました。


2階の接続廊下には雑誌を置き、ライブラリーコーナーとして活用。

フレームで囲まれたコミュニケーションスペース「C-Cube」を複数設置。掘りごたつ風の空間もあれば、テーブルを椅子で囲んだ空間も。

執務エリアと実験エリアをつなぐ、4階の接続廊下。打ち合わせもできる半円形のブースが設置されています。


3Fと4Fをつなぐ、「レヴューコーナー」と呼ばれる大階段。壁に大画面モニターが設置され、思い思いに腰掛けながらの社内勉強会やプレゼンテーションが開催されています。

天井の高さを活かした、広々とした空間。むき出しの構造体が、今の時代に合う空気感を醸し出しています。

ワークショップで出し合った アイデアをデザインに反映。

カジュアルウェアを中心としたアパレル製品の企画・製造・販売を手がけるヤマト インターナショナル株式会社。2017年に設立70周年を迎えるにあたり、その数年前から「Yamato 70th "Change!" Project」という活動を始め、制度も含めたワークスタイル変革を進めてきました。働く場についても、ただ社員が働きやすいというだけではなく、企業戦略の実現と社員が自信と誇りをもって働く場のバランスを考えて作っていくものという考えに基づき、「コミュニケーション・スピード・効率化」をキーワードにワークショップから抽出した社員のアイデアをプラス。「ありたい姿」を体現するフラットなオフィスが生まれました。

東京・大阪のメンバー合同でワークショップを実施。社長から若手まで参加して「これから会社はどうあるべきか？」「どんな働き方をしたいか？」をテーマにアイデアを出し合い、オフィスのデザインに反映しました。

CASE 07

ヤマト インターナショナル株式会社

既存の建物を上手に活かして必要な場を使いやすくレイアウト

プランは既存の自社物流センターを活かし、物流倉庫スペースを若干縮小しながら、周囲にL型に配置されていたいくつかの部屋を移設。空いたスペースに本社機能をコンパクトにまとめる方向で進められました。エントランスは、既存の受付を利用しながら新しいデザインに合うようにリニューアル。そこから応接室、総務部、経理部が一直線に並び、やがて執務エリアとクロスする使いやすい設計です。

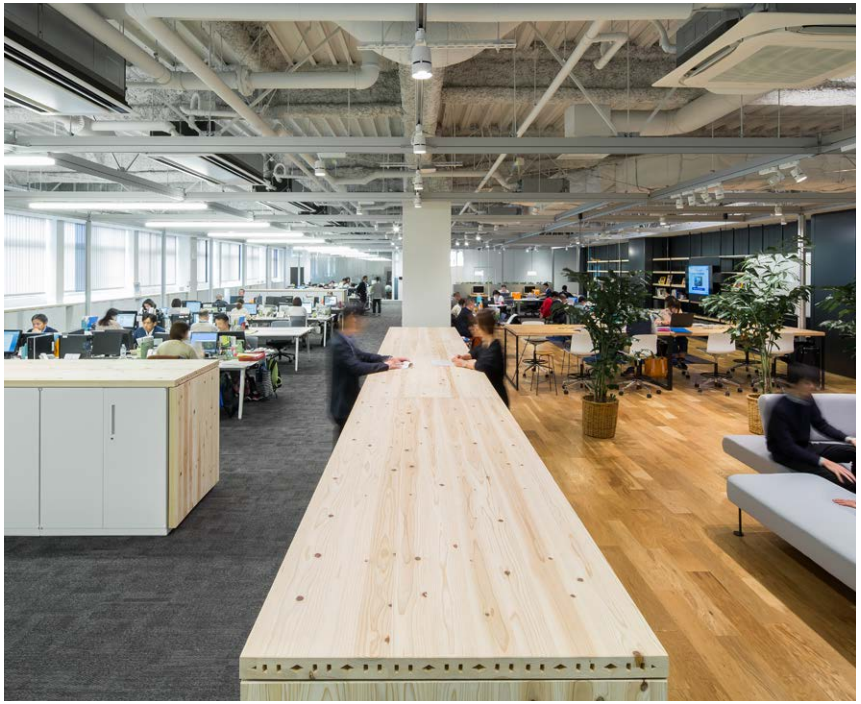
応接室は3部屋を用意。それぞれにインテリアテイストや家具のタイプが異なり、打ち合わせの雰囲気や目的に合わせて場を選ぶことができます。

オフィスの入り口は物流倉庫スペースに隣接。ドアにはカードリーダーを設置し、セキュリティを高めています。

開放的な空間の中に多様な働き方への配慮がいっぱい

執務エリアはコンパクトにまとまっているものの、とても開放的な雰囲気。もともと倉庫として建てられている天井の高い空間を、スケルトン天井にすることでいっそう伸びやかに見せています。アパレルメーカーらしい、カジュアルでスタイリッシュなインテリアも居心地の良さの理由。仕切りをなくしてフリーアドレスを採用し、さまざまなタイプの家具を用意することで、一人ひとりの働き方に対応しています。床や机、ロッカーなどには豊富に木材が使われ、温かく明るい印象のオフィスに生まれ変わりました。自分たちで意見を出し合ってつくり上げた空間だから、愛着もひとしおです。

透明ガラスだけで仕切られたオープンな社長室。フラットな雰囲気とコミュニケーションの活性化を実現します。



左が固定席、右がフリースペース。互いをさりげなく仕切るカウンターも、立って作業したり、サッと打ち合わせできる場になります。

集中して作業できるコンセントレーションデスクも用意。煮詰まったらフリースペースへ。

フリースペースにはハイテーブルやベンチ、ファミレス風のブースなどのさまざまな席があり、コミュニケーションしやすい雰囲気。

ソファに座ってカジュアルに会話できる、カフェのようなスペースも。

オフィスで健康増進！コミュニケーションも活性化。

通信ケーブルや電線の製造で世界的なシェアを誇るフジクラは、「健康経営」を経営戦略の一環として掲げています。オフィスリニューアルに際しても、社員の健康を増進するオフィス空間のあり方を模索。いつもの何気ない行動を変える数々の仕掛けを設けることで、オフィスを「健康になる空間」へと変身させました。その中心となっているのが、「FHAB（ファブ：Fujikura Health Activity Base)」と名付けた空間です。社員の健康活動とコミュニケーションを活性化する FHAB を各フロアに設置し、健康経営※をステップアップさせる拠点としました。

※「健康経営」は NPO 法人健康経営研究会の登録商標です。

社員の健康増進に役立ち、コミュニケーションも活発にする独自の空間「FHAB（ファブ）」。誰でも利用しやすいオープンな空間です。

“tsunagu”LIBRARYと呼ばれる2階のFHABでは、ストレッチ運動を促すサインを壁にデザイン。仕事をしながらでも上手に健康活動に取り組めます。

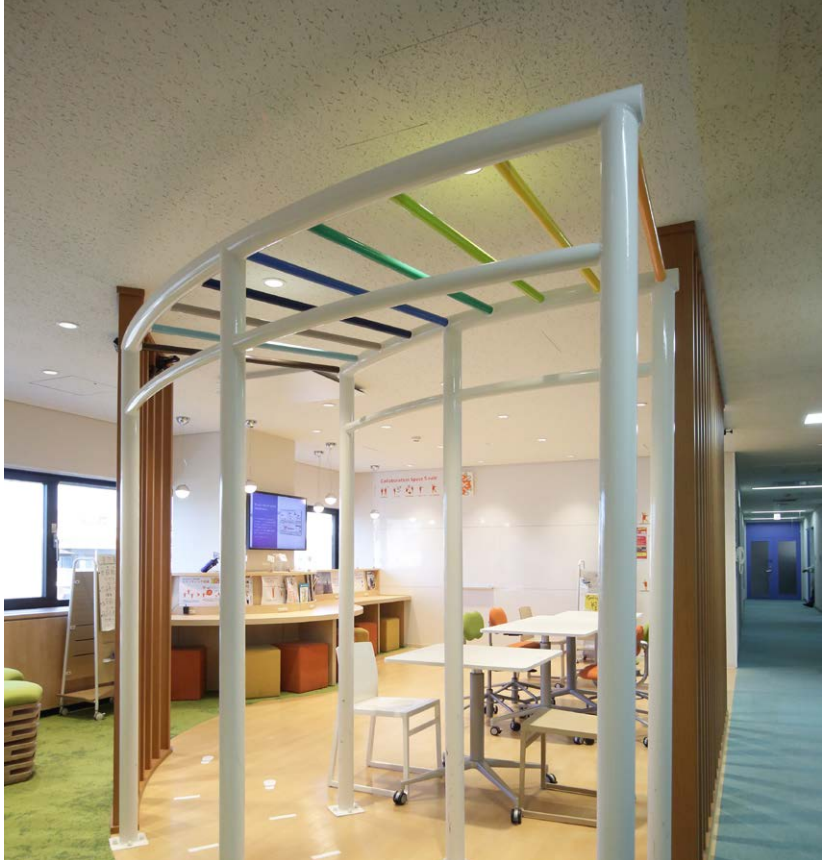
CASE 08

株式会社フジクラ

身体を動かしてアイデアを出し合う COLLABORATION SPACE

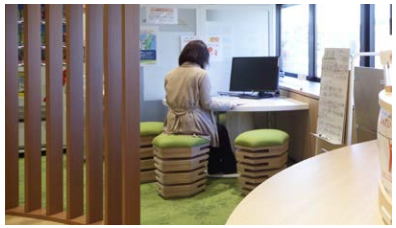
各フロアの共有スペースに設けられたFHABの中でも、とりわけ特徴的なのが6階と2階。まず6階のFHABは「コラボレーション スペース」と呼ばれ、身体を思い切り動かしながらアイデアを出し合う空間として設計されています。歩いたり、ぶら下がったり、壁一面のホワイトボードに書いたり…。照明が暖色系なので、副交感神経を高めてリラックスモードに入れることもポイント。カラフルな色合いのインテリアも、脳を心地よく刺激します。

デジタルとアナログ情報が並ぶ「情報収集エリア」。オープンなスペースなので、背後の白いテーブルともコラボレーションできます。



子どもの頃を思い出し、ついぶら下がってみると「昔の自分じゃない！」と気づかされる「思考うんてい」。鈍った身体が悔しくて、もっと運動をやりたくなってしまう、そんな自発性を促します。また、ぶら下がることでリフレッシュして、新しいアイデアが浮かびます。

人が集まり、情報ツールを活用しながら議論。ルーバーにはホワイトボードや書架もプラスできます。



パソコンの画面をモニターに映し、2〜3人で打ち合わせができる「デジタルコラボエリア」。

壁一面のホワイトボードは、描いたり貼ったりできるほか、プロジェクターで映像を投影することも可能。

さまざまな情報が飛び交う “tsunagu”LIBRARY

2階のFHABは「“つなぐ”ライブラリー」。執務室では得られない、さまざまな情報が飛び交う空間です。本棚に囲まれて書籍を探すことも、デジタルサイネージで時事ネタを集めることも可能。お目当ての本が見つかったら、ベンチに腰を下ろして読書をしたり、借りて帰ることもできます。疲れを感じた時は、壁のストレッチサインに従って運動。自発的に体験や学びを深めるための仕掛けが詰まった共有スペースからは、仲間との会話も自然に生まれます。同社では、こうしたFHABの利用率を徐々に引き上げ、健康経営をさらに追求していくことをめざしています。

観葉植物を囲むように丸くつくられたベンチ。植物の緑に癒されながら、本を片手に腰を下ろせます。

リアルタイムで情報が得られるデジタルサイネージ。組織内の情報も共有できます。

本棚に囲まれた空間は、図書館に迷い込んだよう。多分野の書籍や雑誌が並び、自分の健康づくりに役立つ情報も収集できます。

開放的なエントランスホール。港から出航する船のような、ユニークなレセプションデスクがお客様をお迎えします。

企業の世界観やメッセージを港町になぞらえて共有・発信。

2000年にコンサルティング会社として船出した株式会社リンクアンドモチベーション。現在は連結会社14社、社員数1,400名以上のグループへと成長しています。こうした企業スケールと、多様化する働き方への対応を考え、東京・銀座6丁目の複合施設「GINZA SIX」内へと本社移転しました。オフィスを「同じ世界観を共有して働く“場”」さらに「自分たちのメッセージを伝える“メディア”」と捉える同社。新オフィス構築にあたり、これまでの道のりを「SAILING(航海)」、全国の各拠点を「SHIP(船)」という世界観で捉え、「PORT(港町)」というコンセプトのもと「LINK PORT GINZA」と命名しました。

「PORT」のコンセプトを隅々まで徹底し、社内の案内表示も港町を思わせるデザインに。来訪者にも、他社とは違う新しさや独自性を感じさせることができます。

CASE 09

株式会社
リンクアンドモチベーション
LINK PORT GINZA
（東京本社）

港町の船着場で迎える来客と
キャンパスでともに学び、くつろぐ

オフィスは大まかに「HARBOR（ハーバー）」、「CAMPUS（キャンパス）」、「TOWN（タウン）」の 3エリアに分かれています。「HARBOR」は、船が集まる港をイメージした来客エリア。感性を刺激する赤い壁と、船を思わせる形のレセプションデスクが印象的で、来訪者と打ち合わせできるオープンスペースや会議室も用意。「CAMPUS」は研修エリアとしてつくられ、研修室や講師控え室のほかに休憩スペースもあり、同社のナレッジを習得した人達をたくさん輩出しています。

オープンなワークスペースは
それぞれの街区に“公園”も設置

執務エリアとしての「TOWN」は東・西・南に“街区”が分かれていますが、すべてのグループ会社がオープンにコミュニケーションできるように壁をなくしています。働く人は、さまざまなワークシーンに合わせて座席を選択することができます。また、それぞれの街区にパークと呼ばれる憩いのスペースがあり、さらに西の街区には、毎日の昼食やイベント時に交流できるマーケットも。活気にあふれる TOWN から、今日も時代を先取りするアイデアが生まれています。

グループ内の各法人専用の個室はショップと呼ばれ、バーバーショップ、ドラッグストアなどの愛称が付けられています。セキュリティレベルの高い情報を扱う場合は、この個室で仕事を行います。

ハーバーエリアのコーナーに位置する、灯台をイメージした「ライトハウス」。気軽な打ち合わせなどに利用でき、壁面では同社の歴史や社内報を動画で紹介。

来訪者とのミーティングを行う会議室は、船にたとえてシップと呼ばれ、それぞれに世界の冒険家の名前が付けられています。

芝生のような床が爽やかな空間は、大学にある“中庭”をイメージ。 研修やセミナーの休憩時に、同社発行の書籍も見ながらくつろげます。

広々とした研修室は3部屋を確保。研修内容に合わせてテーブルを動かせます。

マーケットでは、希望者がワンコインでお弁当を購入できるほか、雑談や打ち合わせもでき、社員の誕生日会などのイベントも可能。

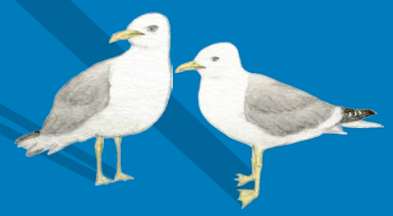
ワークスペースではシナジー創出が必要な部署を隣接させ、事業戦略とオフィスレイアウトをリンクさせています。

各街区に設けられたパークでは、健康器具でリフレッシュすることが可能。情報が流れ、最新のIT機器を使うこともでき、“働学遊”の融合を実現します。

健康オフィス神戸

私たちは、働き方改革や
ワーク・ライフ・バランスの実現に取り組んでいます。

神戸市市民参画推進局参画推進部男女活躍勤労課
〒650-8570 神戸市中央区加納町6-5-1　TEL：078-322-5179
メール：danjyo@office.city.kobe.lg.jp
URL：http://www.city.kobe.lg.jp/life/community/cooperation/office.html



United Nations
Educational, Scientific and
Cultural Organization

City of Design
KOBE

Member of the UNESCO
Creative Cities Network
since 2008

神戸市広報印刷物登録　平成29年度　第702号（広報紙印刷物企画A-1類）

◆この印刷物は、神戸市グリーン調達等方針に関わる
判断基準を満たす紙を使用しています。
◆リサイクル適性の表示:

リサイクル適性Ⓐ
この印刷物は、印刷用の紙へ
リサイクルできます。

R100
古紙パルプ配合率100%再生紙を使用